

シリーズ開始にあたって

本シリーズ刊行の目的と資料の経緯

本シリーズは、奈良文化財研究所所蔵の『山内清男考古資料』について、より詳細な情報を公開し、研究をはじめ文化財の利活用に資することを目的として刊行するものである。

山内清男博士（1902-1970）は縄文土器の編年網の構築を代表に、数多くの研究成果をあげた研究者として著名な研究者である。その研究の基礎となったのは、膨大な考古資料の収集とその詳細な分析を通じてであった。

これらの資料が奈良文化財研究所で管理することとなった経緯については様々な事情があるようであるが、その一端は『山内清男考古資料1 真福寺貝塚資料』に触れられている。これによれば、成城大学文芸学部の山内研究室に保管されていた蔵書類、考古資料は1975年に茨城県那珂湊市の藤本弥城氏の協力で藤本氏の知人宅の土蔵に移管され、次いで1983年に資料の移管先を奈良国立文化財研究所にすることとなり、1984年に資料の運搬をおこなった。これには、当時の所長であった坪井清足の強い意向の下、佐原真が中心となって作業を進めることとなった（佐原1989）。

蔵書類については、現在奈良文化財研究所において山内文庫として公開されており、また書簡・ノートなどについては早稲田大学會津八一記念博物館に収蔵されている（早稲田大学會津八一記念博物館2021）。

奈文研史料『山内清男考古資料』

このような経緯で奈良文化財研究所に収蔵された考古資料については、整理作業が進められ、奈良（国立）文化財研究所史料の『山内考古資料』として17巻が刊行された。この整理作業については佐原真と金子裕之が担当となり、実際の作業については奈良（国立）文化財研究所だけでなく、対象資料の所在地周辺で研究をおこない、また当該地の資料に詳しい大学・自治体・企業の研究者を調査員として委嘱して進められた。刊行された書籍の多くはこれらの研究者の献身的な活動により達成されたものである。また、九学会連合による能登地方の調査成果の報告では、石川考古学研究会が母体となった報告書刊行委員会によってまとめられた。金子氏退職後は巽淳一郎、小澤毅が担当を引き継ぎ、1989年から2009年までに17冊の資料を刊行した。

再整理へ

2009年の史料刊行をもって、山内清男考古資料については整理が一度終了することとなる。その後は、見学や展示への貸し出しなどを年数度おこなっていたが、多くの資料が木箱に平積みになっている状況であり、目的とする資料を容易に発見できない、見学者と管理者双方に負担が大きいといった問題が発生していた。また、遺物の収納に使用されていた木箱の破損や包装していた新聞紙・酸性紙などの劣化により、資料が混雜する危険性や資料調査・整理時の事故を引き起こす危険性があった。このため、2014年に金田が室長として管理を引き継いだ際に、基礎的な整理と資料の把握をおこなうこととした。

この段階では収納後長期に渡り保管してきた資料に付着した塵芥の除去と、刊行物単位での収納をおこなうこととして作業を続けたが、2016年より整理を本格化し、客員研究員中村亜希子を中心に整理を継続的に実施した。この間、収納什器の確保により収蔵状況の改善を達成した。加えて、当時を知る研究者への聞き取り調査などをおこない、資料形成の過程や背景、収集状況などの調査もおこなっている。また、大阪電気通信大学の門林理恵子教授の協力により、収納データベースを作成した。

一連の作業を通じて、報告に取り上げられた資料は担当した研究者によって選択されており、資料の取り上げ方に差異があることや、基準資料となっている遺跡の資料が未報告のままであることが明らかとなった。この状態は、『史料』の刊行方法の多くが調査を委嘱された研究者の協力によるものであり、統一した方針もない形で整理・報

告頂いたことから当然のことと言えよう。また、縄文原体資料と、それを回転押捺した粘土板の存在をはじめ、カメラやカードといった氏の研究に関する資料の存在も明らかとなった。

これらの経緯により、山内清男考古資料については学史上の重要性や収蔵者としての責任において、更なる情報化とその公開を進める必要を認識した。管理する埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室には縄文時代を対象とする研究者が不在なため、複数の『史料』の刊行の中心的な存在であり、全国の研究に詳しい京都大学泉拓良教授に相談し、紹介頂いた客員研究員高野紗奈江を中心に縄文時代を研究対象とする大学院生、学生を雇用して整理を進めることとした。この途上で、縄文原体や粘土板が京都大学に提出した博士論文で使用され、また死後刊行された『日本先史土器の縄紋』(山内1979)に収録されたものであることが明らかとなった。

新しい報告へ

このような経緯から、埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室を中心に山内清男考古資料の再整理と未発表資料についての情報公開を進めることとした。特に、縄文原体については定本として研究者が必携する『日本先史土器の縄紋』の刊行後長い時間が経過しており、広く情報を共有することが難しい状況にあることから、早期の情報の共有が研究に資すると考えて優先的に作業をおこない、成果を公開することとした。続いて、公開されていない資料について編年の指標となった遺跡の資料を含めて整理と公開を進めたい。本書がその最初となる。

また、実資料の公開と併せて、研究活動を支えた道具などの整理もすすめており、既に成果の一部が公開されている（中山ほか2021、荒木・高野2022）。

費用と人材がない状況で、資料をめぐる研究環境は必ずしも良好ではないが、京都大学との連携研究協定の締結などにより再整理が進捗している。また、既刊行の『史料』所蔵の資料についても見学や貸し出しなどに対応できる整理がほぼ完了し、学史上重要な資料の観察が可能となっている。これらの活動にご理解、応援いただき、重要資料を死蔵することなく、成果および収集資料を更に活用していただければ幸いである。 (金田明大)

荒木清花・高野紗奈江 2022 「山内清男が遺した品々」『奈良文化財研究所紀要2022』 奈良文化財研究所
佐原真 1989 「山内清男とその資料」『奈良国立文化財研究所史料30山内清男考古資料1真福寺貝塚資料 奈良
国立文化財研究所』

中山雅士・中村亜希子・高野紗奈江・中村一郎 2021 「山内清男のカメラ～撮影・現像関係資料の紹介～」『文化財写真研究11』 文化財写真技術研究会

山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』 先史考古学会

早稲田大学會津八一記念博物館 2021 『山内清男コレクション受贈記念シンポジウム 山内清男と縄紋文化』
早稲田大学